

「世の終わりについて」

1A 教会のために来られる主

1B 切迫性

2B 救いの完成

1C 神の恵み

2C 主の愛

3C 清め

2A 教会と共に地上に来られる主

1B 教会の背教

2B 世への裁き

本文

カルバリーチャペルの DNA には、「主の再臨」があります。主の再臨には、二段階があります。主が私たちのために戻って来られること、これを「携拳」とも呼びます。天から空中まで主が降りて来られて、地上にいる私たちは引き上げられて、空中で主とお会いします。既に死んでしまった聖徒たちもこの時に甦り、この携拳にあずかります。そして、主が私たちのために地上に戻って来られる出来事があります。私たちは主が私たちのために来られることを、今すぐにも起こることだと信じており、また、神の怒りが地上に下る大患難から救われるためにも戻って来られることを信じています。したがって、私たちは、「患難前携拳」を信じています。また、主が私たちと共に地上に戻って来られて、それで神の国を地上に立てられることを信じています。その地上における神の国は、黙示録 20 章で千年間続くことが預言されているので、しばしば、「千年期」と呼ばれます。それで、私たちは「千年期前再臨」を信じています。携拳についても、地上再臨についても、それぞれ、時期について説があります。けれども、これが私たちカルバリーチャペルの終末論についての立場です。

1A 教会のために来られる主

終末について語ると、その難しい神学の議論がすぐに始まりますが、どうかそうしたもので、純粋な再臨の希望を揺るがしたり、注意を逸らされたりしないようにお願いします。主ご自身は、私たちに単純に、ご自分が戻って来られることを待ち望むように願っておられるのです。

1B 切迫性

ヨハネ 14 章 1-3 節を読みましょう。「1 あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。わたし

のいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」これは、イエス様が十字架に付けられる前夜、弟子たちに対してご自身が彼らからいなくなり、御父のもとに戻られることを語られた後に、彼らに慰めるために希望を語ってくださったものです。これから自分たちの主が十字架に付けられるという大きな試練にあう弟子たちは、心を騒がしていました。イエス様はペテロに、ご自分を三度、知らないという告げられました。当然、心が揺れます。それでイエス様は、「心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」と言われたのです。

そして与えられたのが、この約束です。主はすぐに戻って来られることを約束されたのです。天において彼らのために住まいを備えてくださいます。この住まいは、もしかしたら復活の体そのものかもしれません。それを備えて戻ってきてくださいます。私たちも、弟子たちのように、イエス様を信じて生きるのに困難な時代に入っています。だから、すぐにつまずきやすくなっています。けれども、イエス様は心を騒がせることなく、ご自身が戻ってきて、彼らを天に招き入れてくださることを約束してくださったのです。

去年の修養会で、ある兄弟から質問を受けました。「日曜学校で、携挙について教えるべきでしょうか。」という質問です。私は答えました、「もちろんです。イエス様がすぐに戻って来られるよ。」と言って、ヨハネ 14 章を教えれば、それがそのまま携挙の希望であります。私がカルバリーチャペル・コスタメサの礼拝で驚いたのは、イエス様が戻って来られるのを今か、今かと、すぐにでも来てくださるようになっている姿でした。説教者が、「イエス様は、すぐに戻ってきてくださいます。」と語ると、大きな拍手が起こりました！これまで、再臨といえば重々しいもの、そしてどうなるかわからないので複雑なものという、否定的な印象が強かったのですが、そんなに身軽で、待ち遠しいものであることは分らなかったのです。

けれども、主が戻られることについて、聖書ではそのような期待に胸を膨らませるものであることが書かれています。「テトス 2:13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。」祝福された望みです。「2テサロニケ 1:10 その日に、主イエスは来られて、ご自分の聖徒たちによって栄光を受け、信じたすべての者の…そうです。あなたがたに対する私たちの証言は、信じられたのです。…感嘆の的となられます。」

私たちが、この地上を旅人のように生きて、天を待ち望む時、この方の到来を今でも来てくださることを願うのは当然のことです。使徒たちは一貫して、主が自分たちの生きている時に来られることを待つことを教えていました。パウロはこう言いました。「ローマ 13:11 あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。」ヤコブが言いました。「5:8 あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。」ペテロが言いました。「1ペテロ 1:13 ですから、あなたがたは、心を

引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのときあなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。」そしてヨハネも言っています。「1ヨハネ 2:28 そこで、子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現われるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入るということのないためです。」

2B 救いの完成

ですから、今か、今かと期待して待つものです。そして携拳は、神の救いの完成であります。私たちが神の恵みによって、信仰によって救われたことが、携拳によって完成するという非常に重要な教えがあります。

1C 神の恵み

パウロはローマ 5 章において、恵みに信仰によって近づけられたことを話した後で、神の愛について説明しています。あの有名な言葉、「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。(8 節)」がありますが、それで 9 節、「ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。」とあるのです。神の怒りから救われるのは、地上に対する神の怒りであります。大患難であります、それから救われるのはなおさらのことだ、と、十字架による神の救いが携拳で完成することを教えています。ローマ 8 章 30 節も、「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」とありますが、栄光が与えられるのは主が戻って来られる時です。そして、ピリピ 3 章 20-21 節にははっきりと、こう書かれています。「20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」

教会が大患難を通ると教えているところでは、終わりに救われるのがあたかも、自分たちの努力の結果であるかのように教える傾向があります。たくさんの困難に耐え忍ぶ力を持っている一握りの聖徒たちが患難でも守られて、それで神が受け入れてくださると思います。それは、御霊によって始まったのに、肉に拠って完成させるというガラテヤ人の犯した過ちと同じ過ちになっていくのです。同じように、千年王国についても、千年王国の後に再臨すると考えている人は、今、自分たちの努力によって、神の国をこの地上に建設すると考えています。それで、やはりもっぱら神の恵みによって救われたのに、それを自分たちの手で完成させようとするのです。ですから、「たかが携拳、されど携拳」なのです。私たちの終末の捉え方は、今の信仰の姿勢や教会生活に深く関わってきます。

2C 主の愛

そして私たちは、主の愛の中でこの方がすぐにでも戻ってくることを待ち望んでいます。「1コリン

ト 13:13 今、私たちの鏡にぼんやり映るものを見ているですが、その時には顔と顔を合わせてみることになります。」私たちは、顔と顔を合わせることができます。主をはつきりと見るのできる日であり、主を愛する者にとっては待ち遠しいのです。パウロはこうも言いました。「1コリント 16:22 主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。」使徒ヨハネも、黙示録の最後に、「22:17 御霊も花嫁も言う。『来てください。』これを聞く者は、『来てください。』と言いなさい。」と言っています。花嫁とは教会のことです(エペソ 5 章参照)。教会が花嫁であり、御霊と共に花婿であるキリストが来られることを待ち焦がれています。

3C 清め

そして私たちは、主を待ち望む中で、その愛がさらに清められていきます。「1ヨハネ 3:2-3 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」主にお会いすることと、聖めとは深く関わっています。「1テサロニケ 5:23 平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。」

そして、私たちが忠実に主に仕えていくための動機付けとなります。「マタイ 24:45-47 主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な思慮深いしもべとは、いったいだれでしょうか。主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せるようになります。」たとえ隠れた行いでも、主はそれを公平に評価してくださいます。ですから、人目だけの奉仕ではなく、主への奉仕をすることができるのです。カリフォルニアにあるカルバリーチャペルの牧師でリッチさんという人が、かつてカルバリーチャペルで清掃員の奉仕をしていた時のことですが、当時の礼拝堂のトイレは今のようによくしたものではなかったので、排泄物がこびりついてしまうことがあったそうです。でも、外からは見えない部分にこびりついているので、そこをきれいになくても、誰にも責められません。「チャックも見ないだろう。」という思いが頭をよぎったそうです。けれども彼は、「イエス様は見ておられる。」と気づいて、きれいにしたそうです。

そして主が戻って来られることは、聖霊に満たされ、主の証しをしていく大きな動機付けとなります。主が聖霊のバプテスマの約束を与えられた時に、弟子たちはイスラエルのために国を再興してくださいませんか、とイエス様に尋ねました。それは、聖霊が降ることと神の国が地上に立てられることは密接につながっているからです。五旬節に聖霊が降った時に、ペテロはヨエルの預言によって、すべての人に御霊が注がれて、それで天と地に不思議な業を主が行なわれる、すなわち大患難が来ることが書かれています。神の国が立てられる前兆として聖霊の注ぎがあるのです。ですから、聖霊が注がれ主の証しをするということは、神の国が到来することを、接近していること

を意識している中で注がれるのです。

2A 教会と共に地上に来られる主

そして私たちは、教会として、神の怒りであり大患難、世への裁きについて心に留めないといけません。

1B 教会の背教

パウロはテサロニケの人たちに、「2テサロニケ 2:3 なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現れなければ、主の日は来ないからです。」と言いました。反キリストが現れるのですが、それから大患難が来ます。けれども、反キリストが現れる前に、教会に背教が起こりまず。背教について、パウロはテモテ第二の手紙 3 章で、こう話しています。「3:1-5 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。」なぜ終わりの日が困難なのか？ここに列挙されている、自分を愛する人々が増えるからですが、これは世の姿であります。しかし、その世が「見えるところは敬虔である」中で行なわれていく、すなわち、キリスト教会の体裁を保った中で行なわれていく、ということなのです。ですから、黙示録 2-3 章にある七つの教会に対して、悔い改めない者たちが大患難を通る話を書いてあるのです。教会という組織や外見があっても、神の恵みによる救い、その信仰に留まっていない人たちが多くいて、彼らは世のものですから、世に対して行なわれる神の裁きを受ける、ということになります。使徒ペテロも同じことを話しました。「1ペテロ 4:17 なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう。」

そしてテモテ第二 4 章、ペテロ第二 2 章、ユダの手紙には、教会の中に違った教えをしている者たちがいて、人々が惑わされることが書かれています。教会の中に、世の教えと変わらないものが入ってきて、人々が世と変わりなく生きようとするようにさせる教えが入っていることへの警告が書かれています。ですから、私たちは神のご計画の全体を余すところなく聞き、それで悪い教えから守られる必要があるのです。

2B 世への裁き

そして世が裁かれます。私たち、携挙があるから、神の裁きを免れることができるからという安心感を抱いているだけでよいでしょうか？そうではありませんね、私たちは神に選ばれた聖なる国民であり、祭司であります。人々のために執り成しをするように召されています。アブラハムがそうでした。彼は自分の甥ロトとその家族のために執り成しました。ソドムとゴモラが裁かれるのを知っ

て、彼らが共に滅ぼされるのは正しいことですか？と問いかけています。神は、もし正しい者が十人いれば、町全体を赦すと言われました。十人もいなかったのに、神は裁かれました。しかも、ロトとその家族が出て行くまで、裁きを遅らせたのです。このように、神は決して正しいとみなした者たちをそうではない者たちと共に裁くことはなさいません。

けれども、ここでアブラハムが執り成したことを私たちも知りたい、倣いたいと思います。この世から聖め別たれています。けれども、神はこの世をご自分のものとして愛しておられます。私たちもまた、ある意味でこの世とキリストにあって一つにされています。この世で起こっていることは、自分にも起こっていることです。エレミヤが神の怒りによって滅びてしまうエルサレムをまるで自分が滅びるかのように悲しんだように、私たちもこの世に裁きが来ることを悲しみ、一人でも多くの方がその神の怒りから救われることを願うべきです。